本朝文鑑 巻六 巻七

一 5
2329
4

門 ヘ 15
2227
巻 八

靜居蔵

本朝文鑑 六

序跋類

其代序　寺山百句序　一居序　觀音懇座序
某合序　千句跋　啼鴉集跋

對句類

花鳥對　影法師對

序跋類

其袋ノ序

嵐雪

ちゝはゝなれして天の袋ありあらゆるものゝ入物あり今
おもふことは母の袂なるへし草子を抱へてそ父は
追はれてなきわふしよこらし袋の中をさかしもとめ之を
て庭ありし袋の口もとき反古ありとそれそれ嚢袋
は汝浦の名をかしうるもあけて猿をはすあるとき武士さ
中書袋あり又職に忠袋ありて肩にかけて袋へかゝ
あり枕を入るゝ袋詞の中へやれこそや春山宮を月巻笑
ち蓑ありけり茶の袋は光屋のひねもすも袋なくれば

やかてふ為薹ら袋とかゝりてを袋は息くたりて
むかし言て其袋やなにのたゝかをる月のなきとて歌
ひろひくる色紙を料の縁廃袋ときこえ草の葉を縫
稿をかゝりてこそ又稿たしかの又年のみなり日に
嵐雪ゝにつゝかる序とそ

紀云此序ハ比ニシテ賦ノ体ナリ去レハ袋ノ二字ヲ以テ
俳諧ノ字様ヲ成セルヨリ和漢ニ挙テ詩ノ袋ヲ云ヘル誠ニ
詩哥連俳ノミナラシヤ結語ハ秘蔵ノ二字ヲ置テ蘭ト
稲トノ塵詮ナル例ニ文章ノ塵実ヲ傳ヘテ武城ニ其角
嵐雪アリトハ蕉門ノ人ノ常語ナルヲヤ

東山百句序

山本堂

[illegible]

[illegible]

武藤の家人[illegible]

和云此序ハ柳子庵ノ文庫ノ書類中ニ封紙ナキヲ遺サレシカ今ハ選ミテ序ノ一ヨリ加フ去レハ故有ノ七日ハ十月十二日ナルヲ、討師ハ總テ三月ニ佐長セリ但シ東西ノ門跡ニ遠忌ヲ勉メラレ、例ナリトウ此時ハ天下ノ門主ヲ催シ洛陽ノ宮近ヲ請シテ三日ノ法會ヲ成セルニ巻頭ニハ遊行上人ノ句ヲ乞イ巻軸ハ武陵ノ冨雪ニシテ其ハ序ハ今ノ書堂ヨリ此巻ハ但シ山口氏ニシテ敬翁ト文章ノ交ナストウ

卜居序

白輪居士

家を近衛河二条一条をよしはて鵠牛ハ水とりをとりて
てこゝに…あをひあるよ陶器を望とてあらはしその
水の内にかくるゝ故かそ自己の智能とをめぐして天地の府
いよいよ…あしんとあるとはや将们てらひてその露雨と
負ひあふ飯鍋をそくし油筒とおありて泥滾の中に
罪人ありておほ法のかすゝてふへきあり山雀を瓢の中
よ内前とこまれ鍋の入口は釜の内に乾坤をかくしむ
彼を他人に造作されておのが世をまふとふらしん哉

波を隔れの客あり湘南に水を漂泊して吾菴西を比
るよこれ卿よ尿ハ明盤子といひ京にある時ハ
柳子庵とふてそその男此智能をそのまゝ作らんと
世の人此造作にこひにらんこおの柳子や今しきを
人よ尾をたへさうするとれとを年を金華の草菴と
むすひて良の柳子庵といひしかくしれハ孺子
冬の杜册の一章と記して机の上にけんと序するうとらも

往云此序ハ筆頭ニカアリテ柳揚自在ノ文章ト称スヘシ
然ニハ自己ノ智能ヲ笑ヒ他人ノ造作ヲ誡メテ中向ニ理屈
ノ修行者ヲ形容セル隠倫ノ身ヲ置ニ所ナカラン此等ヲ禅録

ノ指示トスル(シ)誠ニ此法ハ故翁ノ風雅ヲ慕テ十里ノ霞盞ニ明月
ノ知ヲリヲ成セルヤ宮ニモ我師ノ荷擔人ナル(シ)姓ハ生駒氏ニシテ
自ラ白駒居士ト称ス但シ其此ノ名ハ万子トモ云(ヘリ)

観音遷座記

東花坊

花山院の観世音ハむかし花山院の法皇
ましまさしし所の観世音ハ西国巡れるいふ
なり始め那智の瀧に頓宮ありしの頃なり
瀧を岩根の水に妙覚寺陽の月とぞやむかし
向こ三十一番と称し行ふれと一ハ三ヶ所ありく

三ヶ所ありて廣ら一ヶ所にて廣ら一ヶ所にて應ら一ヶ所
又沉ヶ所と万水一月又ヶ所にて行薩埵のおりに沒
不ヶ所の月又場ヶ所にて一ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所
掘ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所ヶ所
三面十一面者ハ馬頭軍荼ハ吳相と称して魔界
又命役のちりとなり如意輪の像の頭に何とも
おちりとつゐにおふや寅年海辺の思惟とあらかく
ゆふあるとなるとあるとあるふ世に敬ふし中ハ
のゆをかして邪正のかひるかかして空假中のの中
又ゑをかふや権實のの角又あられかふや人々

えらましふ一字うらみ或は重しけれるものふかりして
まる身を百千のかたちとなして百千の衆生をうち
ひき給へは観自在菩薩とも円通大士とも申し侍る
なかりけれ娑婆界にけ大士の顕はせさせ給ふへて世よふ
まれ頭人よりも不信不敬の人をも救ひ給ひ
給ひてもおほかる中にも大士の霊験あらはれは越の中州に
石動の観音寺はなによりも大悲の霊場なる新にこゝ
こゝろを造立してなそれ四面をかくやうもなけらる花人
婦子の遠境のもとをしとむる路なり鬟寒琉璃の
貧窮の悔ひあらしんかたなく諸国の光を一堂にかくやらむ

まし一念にもよミけむ念の掌を合せて帰依まつる此不思議の
極楽浄土とハいふ成へし

按云此序ハ文章ノ要地ナレハ其ハ名ヲ配ニ奇法アリト云
ヘシ去ハ観音ノ娑婆ヲ領シ玉フハ尤モ楞厳ノ所説ニシテ其余
ノ詞モ諸経ヲ播採セリ爰ニ石動（ユスルギ）ノ観音寺ハ現住ノ僧
風雅ヨリシテ三十六歌仙ヲ奉納シテ其レニ此序ヲモトメシナリ但シ
今ノ石動ハ倶利迦羅ノ山ノ麓ナリ

菓合序

蓮二房

ひとし無の渕ぬるりけら菓をあしきる人世よかくれて

南山とのつゝまれたる所にいくそ
そゝり人間のひ蘆こけのうへに杜丹とまり苔ふと
ゝ雪にねたの義とあ[illegible]ふ和漢人性の
けれるこゝにて[illegible]あの[illegible]とえ[illegible]れ
ゝ宝[illegible]れ[illegible]
あ[illegible]て奇人[illegible]
[illegible]
なの[illegible]
けむ[illegible]
和締の[illegible]

の業杜とかつりんにけれく宝こけ價のかゝれりけ
才一こゝ沈濃の色とそくゝ[illegible]こゝ毫重のすと
あ[illegible]
[illegible]
銀繍ハ[illegible]
のあ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
村雨を[illegible]

こしられゑありまへても唐京の筆譜もそのかミと
つんさる也あつさくおもんら神代やいつの国より流るゝいと
ふ筆にりて橘の京の総もあるよし尾張よ貢ふる
ありて天満よ伯卿就ありけりて都よちらくされ
たのうんとかまふるていとよわるて大津よ月下門の名
もゆりし宇治ふしき山浦ふし跳波の名あいふなり
て伊冊よ花麒麟の世よあたる席者もしかふ筆を
そのあかしけて百筆のかくさらとえてぬよ或ハ此暗し
習嘆も或ハ清嘆といひ指嘆と透嘆をなのさふ
あら紀あ大かるにもかゝらとおやまるに尉斗嘆ハ筆の

よめ得ねあれてやむもの大ありんとかゝちまよそやして筆も
のふよやりあまねまとるまていむ形のかゝらんに洗ひて作のむの
世をはしてハ弊とつひ丁ろていふ作のかくちも百ほれ
これともとおそておいりまそそる地とよ見きてまさらて此ふれの
名をうきいもたむり此体あり和孫とまそまる羅
隷よ弘れて今にハたむ象の楷子ふかやけい隷家此
うしおれ私るよみるハ此あるへし一小楷のうしハ彼の筆法
よ百代せゆぬのむとあつまふ中よ衣よ金翅るあり
右よ法象金粉あり来花南とつ筆の文ハて定と
みへるそといつて所の名るまて花名をとまのそての

は北堂子といふあらん或は娑婆ぶつ阿業体あ〳〵右将左将
の名とふるへきら衣通(ソトホリ)姫の酔とわらふて三人鑑大和笠
まてふはりひねの葉をあつめたいんて又ハあとへ腰越とも
さはむすびはらしくみゆる月ありん柄わけは年の末年
又やまぶきん人のあひりをくひるあつて葉ふよ代
のまたしてまなりし生れ

評云此序ハ越ノ俳象ガ佳ホニ葉ナ寄仙ノ三序ナリシヲ此選ニ
下田各セリ去レハ此篇ハ知己(チカツキ)ノ二字ヨリ起リテ人間ノ貧福ニ
喩ヘタルガ絶ニ花影ノ桶手ヨリ朱買臣ガ富田虫ニ結文
セリ或ハ麒麟ノ名ヲ以テ国々ノ花ノ仕舞ヲ云ヘル絶妙ナ

ノ三字ハ神アリト称スヘシ或ハ左ニ金翅鳥アリ右ニ比目金竜アリ
トムイテ朱雀門ノ下ニ一葉ノ字ヲ置タル是ヲ錬鉾ノ文法
ニシテ禁門ノ名ノ響ニモ紛レオラン然ルヲ結語ニモ人ノ重
ヲ忘レス二第ニハ当時ノ寿ヲ祝シタル序中ノ経衣妙ハ文外ニ知ルヘシ

千句ノ跋　　荒木田守武

さて俳諧とてみだりにし笑はせむとはかりはいかむ
花実とそなへ風流にしてしかも一句たゞしくさておかし
くあらんやうと世々の好士のをしへありけるとそれ
とてもかくてもよくみたしこゝに熟合えらにと集むると

三句むすひつる示しあるへしけれはし風を作人の耳も
入やすきに師もまんいそうける争ふなんうそこれ骨
のぬけ句なりよろしもいはまて又さう付まよるつきなや
まりてあつゆきむも轉んいくやまうるに俳諧ハねうすれ
ふよあとあしきと好さるかくの言行なれと何ゝまさ
せの中なれなりけりんやなれん連哥よ事かつてけら
ぬすまなんゝけるを宗鑑のうめのしそんゝてのひ俳諧なよ
とて長流といかなりて得し座するゝうかわよみるし
みえとうせむと入よ一りしとうろ宗旗ゝみかよりの
月讀よ入ねの徒を腰よ佩し宗祇よりさひく

發句なとゝさしはかり近くハ宗牧の一二みえたまれかなく
それらをもきりてよひするよしなりや

評云此跋ハ伊勢ノ人々ノ妄傳ニテ一ニ烏焉馬ノ誤リモ
多カラン今ハ始終ノ文ヲ擇ヲ抄テ中間ニ俳諧ノ親ハ範スル
抄ヲ出セリ宗鑑以下ノ奇言怪語ハ総テ其ハ代ハ俳諧
ノ詞ト知ルヘシ然ルヲ俳諧ノ盛リナラテモ実ヲソナヘ一句
又ここク然モ可笑シクアランヤウニトハ俳諧ニ而世ノ掟ニシテ
何ニカ又ソレナラサランヤトハ儒仏ノ道ヲモ顛倒セル神家ノ人
ノ活語ナラン但シ作者ハ荒木田ノ長官ニシテ其ハ此ニハ
守武既ニ一トナト世ノ俳諧ノ先祖タラン

帰鴉集跋

蓮二房

此一巻は閑如老人の老とをくたるるよりはなれの序なん帰鴉のうゝとつひに跋ふへ序の蓬の老と
つるゝ金をたのみの名のみのみあるは一まゝの業
の雪をしるゝそうそうの名はさしり梅仰ゝ山吹
ちくゝをひのいふくもあゝて松冊に春の雲はくゝるる
八十年の老い言に云ふ一一芸を文衣の方仰て
こしたむのかいれかりゝ付ゝれ初をとひあるより
むゝそうゝれの名は言はれ一一むゝの老自言れは一

秋を初秋の人は中ゝ月のゆゝたれゝるゝ
よつり魂ゝたり二おのあれをゝ文さゝあり言ふ
れの帰てまるゝ雁ゝよゝ帰ゝれ初ゝれたれ
廉もあ言ゝ秋のちゝゝ文け世のゝ海のかれゝ
秋月の老とゝまれゝ山何角のむゝに
姫ひゝきのんもあゝゝゝ山ゝ言ゝ緑
ゝゝれゝれ初ゝの老あゝ十月の梅ゝゝ
むの人ゝゝゝれゝ初ゝ言ゝ一言月
の言の名ゝとゝ言ゝ言ゝ言ゝの蛾ゝ老と
ゝゝれ焼帰の比の遊ふあれん解帰のれ帰ゝ言

ありて玉〜数と人〜さかれてうひるのまとも
まいんとしてありて深よ幸くの花を言つへ
犯云北殿ノ専用ハ四季ノ名用ヲ配ルニ如アリ誠ニまノ
文法ハ北殿ニモ数多ナカラ何レモ一体ノ差別アリテ其等ヲ
文鑑ノ文鑑トハ云ルヘシ去レハヤ四序ニ年忘ノ二字ヲ置テ
春ニハ今年ノ花ト云イ夏ニハ昔シノ花ト云イテ秋ニハ花ヲ
忘ルスト云ル哀花ノ歌ハ北所ニシテノ前ノ春顔ニモ多ク云リ
冬ニハ焼火ノ更ナルニ依テ句ノ形絶ル煙霞ノ對ノ親切ナル説ヤ
春待ノ二ヨリ以テ二年々ノ花ト云イナセル七縦八横ノ自在
ヲ称スベシ但シ北殿ハ農ノ二輪山ニ住ス先師ト所縁ノ来つ
ず

對向類　花鳥對

東花坊

渡部和歌ハ世ノ天地あり陰陽あり男女あり君臣ハ
美のおりよりよりて父子ハ恩のあるもの夫婦ハ情の
ぬのうたにうつりて事ひとにうつりて哀ひとにうつりて
和ラふのいひふんにうつり新宮のひとにうつりて
行て時ノ事ノ事ひとにうつりて時ノ花ノ花ノ
ちくるふるうたにうつりて恋ノ人ノ人ノ
ちしさとにうつりて月ノ月ノ
花鳥ノ花ノ号ノ花ノ事ノ

ちりぬる秋のむらさきの花のいろん みのそらに花のいろん 雪の
降ちらくにたとへあれし 初雪の 雪のうへの人にたとへあるに
雪のむら消の間に鶯のまねて 鶯の鳴のむらさきのつゆ
い早咲の梅と詠して 雪のうへにも咲ぬるかな 人に
のるとよりて 園のうへにも咲ぬるかな と詩奇
連歌に花鳥の二ツとつゐれいまよりやたのん
とはいとあさる 秋の月 月花とさく 筆の林に
むらの情と字 て 北車の賞 と はいく
恋 陰陽 対 ふ はれ 陰陽の両儀より五倫 つゐと 呼
はいとて それ ゐ の かく ゐ れ 清 ゐ ゐ と や ゐ け て

天ゐ ゐ ん の むら ゐ ゐ と あ ゐ い 夫婦 ゐ 姿 の む ゐ ゐ に 雨 て ち ゐ
ゐ れ ゐ ゐ の む ゐ ゐ の ゐ か ハ 清 ゐ ん の む ゐ ん と や ゐ れ ゐ
君 主 の 雎鳩 い 詩 抵 の 関 南 ゐ ゐ れ ん の む ゐ ゐ ん
れ ゐ ゐ の 鶺鴒 い ハ 雲 の 結 物 ゐ ん ゐ れ て 清 ゐ の む ゐ
ゐ あ ゐ ら ゐ て や か ゐ い 詩 の む や ゐ ゐ て ゐ ゐ い 奇 の
ゐ ゐ ん ゐ て 毘沙 の 兵 ゐ ゐ て 姉 ゐ む ゐ ゐ い
い 姉 ゐ ゐ ゐ ゐ ん や 明 ゐ ん ゐ 一 樹 の 信 ゐ 雲 の
ゐ の む ゐ ゐ ん ゐ ゐ 心 の ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ む ゐ ゐ
む ま の 情 ゐ ゐ て ゐ ま ゐ の 清 ゐ ゐ ゐ ゐ ん ゐ く 梅 ゐ
ゐ ゐ ゐ 野 の ま ゐ ゐ ゐ の 月 ゐ ゐ む く 雪 の 国 ゐ

ゆたかにして富をうしなひて貧窮といふはうあるべきのさまにも梅のむかしてそなと行きくんやそなれ
梅とうぐひすとんやたちたみのむの冒頭を祈るの人のうん
をめさまれて春も霞賓とそなりるの冒をそなれ魂
の冒をそあんよをうれの祈国よいむの冒をし唐土のうを
をまよりれ秋稲よ花舟をこ国のうをうを唐国の人を
詩よたくりて三月の色をとりてやや祈朝の人を鐘よ
かさりてはをまのんとあくたりの以や伽陵のむとたけ
て作も笛色をうをとやや蓮よ豊ねをを和漢の情
よかるひ桐よ風風を唐農の法よあをうたれが鳥

新古の次あはりて掛よ繋馬を又無衛の浮世稀よいたと
庵よおをふを古は眼の極彩色よかやくそより唐様
の獣物師を作よ流とひとれく京風の筆除を筆
よ唐とも詠やるたるくをれるうい今りをれん
のむをあるをやたるとむるもるをを物よ好悪の
編ありて筆の筆よ鐘い連辛の所をたるを根你よ
野を仰詰の塩梅(エンバイ)をふ柿よ彩を京を蛤を栗よ
彩のあをりんあんをり竹よ花のあをひ新あんをたて
その竹よ雪のむををあをりるんいよるもはの
むにしれて松よ舟梅のむをるあるやをれをを

たちこえなのなとはなむかしのしるしあつて　まかりかれの旅寝も
さおて柳の木かれの止宿乃事へおさけへ嵐の歸るさよ
り平ら和それ旅の名よくかれて見らはちるの事を結
えや上路(アゲロ)の山姥しかくもちはくり和音の浦人まく
やりともにはまにむきるのしゆんや人々のむかへし
假云此類ハ宋玉カ對向ヨリ傳ニハ理平廣業ナトノ
鳥獸松竹ノ對ニ效ヒテ先ハ花鳥ノ二字ヲ題セル本朝ノ
風雅ノ的面ニシテ先向イ先對フヘキ物ナルヲヤ但シ對向ノ
文法ハ理論ヲ後ニシ文章ヲ先ニセル委曲ハ前巻ノ題註ニ
在リテなれも設論ノ虚實ヲ知ルヘシ

夫人向者ハ天地陰陽ヨリ君臣父子ノ五倫ヲ云イ其已ヨリ詩云
連俳ニ花鳥ノ姿情ヲ論シタルカ或ハ花モ盛ナルハ制ニ物語
ノ詞ヲ借ウテ花ニ今宵ハ古事ノ主意ヲ取ヒリ或ハ秋花鳥
ニ冬ノ花鳥ト云ヘキニノ啼ト咲トニ數因略シテ互見ノ法ノ句在ヲ
見ルヘシ或ハ第二ニ啼トハ佳吉ノ事ノ詞ナカラ世ノ耳ナレヌ
花鳥ト云イナシ殊ニハ秋冬ヲ錯綜シテ言ニ句讀ノ用ヲモ
知ルヘシ或ハ詩人ニ早咲トハ江南一枝ノ梅ヲ借テ一鳥「不」鳴雪
灞(ハツ)山ニト云ルハ古詩ノ詞ヲ取合セタルハ花ト鳥トヲ拾ヒ寄セテ
是ヲ一時ノ働ト云ヘシ但シ俳諧ノ花鳥トハ鷦鷯(ミソサヽイ)ヲ冬ノ季ナトセル
蕉門ニ新式ノ一條ナリ或ハ云フ人ニ審覚トハ一事只ロカ歌ニ寄

セテ千鳥ニハ花ノナキ古文ヲ云ヘリ或ハ況海棠林トハ對者ノ胸ノ
博達ニ喻ヘテ向者ノ心ノヤ知ラ論セコトナリ
去レハ對者ハ君女ノ二子ヨリ昆弟明友ノ五倫ニテ強テ姿ノ
花鳥ヲ論セス先ハ情ノ花鳥ヲ表ス本ヨリ詩ニ連俗ニハ
姿情ノ先後ヲ知ルトナリ或ハ雎鳩鳩鴿ハ和漢ニ詩ニ音ノ證
文ナルニハ雲ノ作ヲ折ヲ詩ニ周南ニ對シテ鳩鴿ノ故ヲストハ別々ナリ
去レトハ雲ノ作ニ音ハ夫婦同居ノ混本ナレハ鳩鴿ノ古文ニ取合
セタル文章ノ角在ヲ称スヘキ文章ノ博達ニ驚ヘシ或ハ
詩花ニ音鳥トハ漢文ニハ詩ニ取花潤地ト云ヘリ倭音ニハ
初陽毎朝来ト啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩音ヲ合ス

詩徒トハ雲トノ結文ナルヲ見ルヘシ或ハ兄弟ノ花鳥ハ屋誠
例諸ノ業格ヲ用イ或ハ朋友ノ花鳥ハ實地ニ方言ノ語
脈ヲ成ス左モ一樹ノ働ヨリ例ニ屋宙ノ兵用ヲ知ルヘシ
或ハ梅ニ鶯カトハ勅字ハ對者ノ詞ナレハ此ヨヲ得テハ讃
(ヤラス或ハ立方野モ相坂モ總テ古音ノ詞ナヲ苦鄂ハ
花ノヨウニ云イ逢坂ハ鳥ノヨウニ云ヘル是ヲ隠見ノ法ト云ヘシ
次ニ春立ノ二字ハ忠峯ヤ音ヨリ杜詩ノ春寒氷雪ヲ
含メテ寫花ノ二字ノ時節ヲ云ヘル例ニ和漢ノ博閑ナリ或ハ
春モ寂寞トハ春今宴ノ詩ノ蜀魄ヨリ和漢ノ節遠
ヲ云イテ三界ノ雲ハ知ハ邪花ノ云イカケナカラ四季ハ蜀帝ノ怨

意ヲ云ハリ或ハ獅子ニ牡丹ノ續キハ牡丹モ春景ノ事迄同
ジハ和漢ノ論ノ序ヲ備ヘテ天竺ノ花鳥ヲモ云イナセリ
但シ詩ト云イ鎧ト云イテ一年一月ノ意ヲ對セル牡丹ノ
上ノ名語ニシテ況ヤ花實ノ業法ヲヤ然ヲ蓮ニ比ス事
ト云イ伽陵ノ花ノ蓮ニツケテ非ス翠蹈靴ノ詩ヲ今日迄
總テハ花鳥ノ縁語ヲ總テハ其名ヲ文章ニ配シル總テ人
語路ノ新綴アルヿヲ一言ノ粉骨ヲ称スシ或ハ撥ニ製事焉
ト雖ニ紅葉ノ一對ハ先ハ倒將衣ノ格ナカラ全ク意對
ノ奇絶ニシテ景濃モ再ヒ日本ヲ參メテ傳又ニ此等ノ
法格アリト信スヘシ然シハ浮世又吾衛ハ大津繪ノ元祖ニ

狩野古法眼ハ彩色繪ノ先達ト云イナセリ或ハ唐様ニ倣フ風ト
ハ和漢ノ劇景ヲ對シテ中間心ノ花鳥ヲ結語セル此等
ニ文章ノ守ヲ知ヘシ或ハ物ニ好悪トハ強テ一篇ノ論ヲ設ケテ
内ニハ連章ノ景弱ヲ云イ外ニハ俳諧ノ活計ヲ云ヘル柿ニ鶏モ
豆ニ鳩モ例ニ俳諧ノ業格ナカラ一句ノ模様ノ短語ヲ久ヘシ
或ハ栗ニ鶉ト云ハ食ヲ求ル類イヨリ花ニ鳥ノ用アルヨリ竹
ニ雀ノ無為ナラシムハト云ニ世法ノ力ヲ添ヘタル誠ニ文章虚実
ナカラシハ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ芥繪ト云イナセル何レモ詩書
ノ詞ヲ借テ冬ノ花鳥ノ風情ヲ附タル此等ハ無心所着ト云ヘシ
或ハ亂ニ辭花ト云ハ春行宿ニ春ヲ待ウト云ヘル結前生後ノ

花鳥ナレバ年ヨリ正月ノ祝詞ヲ添ヘテ亂ヲ撥ガ君ト云コトリ花
一字ハ折節ノ風流ナランニハ對向ノ結語ニハ古人モ多ク祝語ヲ
用イテ當代ノ万歳ヲ云ヘリケレバ是ニ山蛯モ浦人モ總テハ君ガ
恵ニナツイテ心ノ花鳥ニ和キタル花實自在ノ結文ト云ヘシ但シ
此発句ハ假名ト真名トニ居寄シテ獅子庵ノ遺稿ニ留ラレシカ今ハ
真名字ヲ加ルニ及バス讀者ハ何モ通用ヲ諳ンスヘシ

影法師對　櫟木園

菴の主鏡の中よ又出にけり
誰々何や忽然と来てきたり帝は白髪を結えて見

とおほすに汝何人なれは我か白櫻下に来りて我と對して
座するや彼は白髪と送えて白を問ふに汝何人なれは
我か白櫻下に来りて我と寫して座するや帝は庭前の
江の七度まて立ゐしてなりし昔より我か白櫻下に此
こえの何を我か白櫻下といふや彼は庭前の江此
七度まて世をなしゝ昔より我か白櫻下のこえ
何を我か白櫻下といふや我かされは彼いりて我笑ひは
我笑ふ此ことは僕の常隠比支をつくして緒の拾笑敷
の擱にも宍て云ふ我か心の外にあり実に我紋ハ
左巴あり汝か紋に右巴ありといはれて我よく論みて

きり行やとゝ行んと責下四一論ゝ勝おらうてそと賀ゝ
ゝ云るやたのふ詑とゝ云るにきゝ居ゝ肯おゝセ玄識と
あゝセそうやてやつてや陰士の墳墓へ世間の行爲とおゝ
ゝ四ゝ世ゝの實あうれの實ゝてふん
えゝやゝ一の稱義の世ゝ分別
但公此篇ハ白櫻下ニ誠亳ノ模様ニシテ始ニ年尾ノ句ヲ出シ
続テ元ノ句ヲ以テ作者ハ是ヲ四文格ト題セル誠ニ俳文
ノ一格ナルヲ今ハ選ンテ對向類ニ加フ去レハ白鬚ノ對論ヨリ
亟齋ノ言語ヲ爭ヒテ巴ノ左右ニ決斷セル鏡ノ影ノ差別ハ
分明ナリ去ルハ溪文ノ設論ニモ勝レテ一篇俳ニ十七八箇ノ彼我

ノ二ツヒロヲ畫ムカモ曲折深遠ノ所ナレ況ヤ泡影ノ論ヲ離レテ
結文ハ我ト我心ヲ責メタル急ニ笑中ノ刀ヲ用イテ文ニ虛實
ノ自在アリト稱スレ但シ作者ハ濃西ノ大垣ニ產シテ谷氏ノ
隱士ナリ白櫻下ノ三字ハ門下ノ称号ナリトソ

十九終

本朝文鑑第七

辯類

居眠辯　桃化辯　仰兎辯　自得辯　梅長者辯

巴兮與技辯　招魂辯

說類

勢上人說　名竹手說　櫻高人說　名說

名二子說　論佛說　夜話說　辻談義說

頌類

・蕎麦頌　不懲糸頌

松茸頌　醋德頌

雜類

居眠雜

趙北枝

世ていなまれむの北枝へ百ます祝むるとそうしむに
たもむて眠るもあるもて月と対して覚るもあるも
所ようとても眠るものも孫と乗るゆと伺と云れ
俗ると眠るもなるとつうるも北枝と祝ある獏の思
祝ようもしむると用あれい眠るも用あん牡丹と猫
の祝むる時を輝と用あるてむるあるもて対して
世情のるまるとめるるぬく祝ようやるハ由業の
祝ありてあてやると爰のおるると祝むけあると山ゆい

なるとはるてはをるるそれも眠れるやはるそとるるん
梅を乗るまるて人るをるれると秋も寿も皆祝ある
ありをり花間う輝を有所のおるあるて山谷う鶏へ
栄辰の中と高りるるりはれを眠りてハ君王と駕ら
はるそハ俗民とふいるるるを祝むると用あれ
ハはむるも用ありとるる一祝を祝性のるるる
ると殿皆ハ祝ようく沼殿を祝むはるを模と
乗るるるるるるて殿とれてハ新ともかるる
ハりけるを山寺の児と沼のるて雪原と乗はれ
るると渓のるを陵う帝の膝と乗るるもるる忘

攻おもい百信あるんと金体のくさわられて徐と赤脈の
辯ありて二唐へしたるあへふとも
但云此辯ハ婉轉ニシテ然モ己折明白なり去ハ経俗ノ對ニ
俳諧ノ詞ヲ尽シ蟬鵡ノ對ニ儒老ノ鵬ヲ搜セル一篇ノ
趣意ハ此間ニ知ルベシ況ヤ児ト云ク雪隠ト云ク帝ト云ク
子陵ト云ヘル此等ハ文章ノ皷舞ニシテ君ニモ此辯ヲ傳シ
例ニ虚實ノ文鑑ト云ハン誠ニ人ハ俳諧ニ遊テ文ハ和ニ
ノ道云アリト称スベシ但シ聖草基ハ別莊ニメ趙子ハ彼ノ撰号
なり

桃化辯

蓮二房

いづくにかあつくるるすなのあるのあるなのあるなるの
ゑんとなの客とちるとなるとなるけかあるとわてはは書の
ゑんとし雖とわてはなのよれゑんそれそれそらはと
ちれさんのいひあるん称ふしてはよりて此君の
潛号とちるもるにおもへのそるめるとはれるゑ
此和とわてはけゑあるいそと白文の掃れあんるむ
西を毋う桃をそ年ゑみのり今の蓮二房ら辯一日
ゑひちさて桃のそよいるしゑ先君のいるゑとはるる
化のそをそに故院のおもうけとそよちるいい師父の
恩ゑ感して永く此はと忘れるんるを

杞云〔?〕辨ハ其日ノ實情ヲ演ヘテなしも辨ノ体ヲ尽セリ去レハ此公ハ越ノ瑞泉寺ニ住シテ故院浪化公ノ風流ヲ續キ芭蕉門ノ風雅ヲ慕ヒ給ヘハ今茲ニ桃青ノ桃ノ字ヲ摘テ浪化ノ化ノ字ヲ採レルトソ然レハ王母ヵ桃ノ實ニ蓮ニヵ辨ノ花ヲ對セル誠ニ一篇ノ奇絶ニシテ不忘ノ二字ハ骨ノ節ト見ルヘシ但シ井波ハ其ノ郷ノ名ナリ

伯兎辨

東花坊

越の天下（テンガ）とふ石川のたるしあるて東花坊かくまんとするは三国の昨夏も通るれて此の名の

侯とわらちんいふやさる人の廛寶ハ何ておかましきつ今この心さしの尽経ちてされハそよ伯兎の名をとらひて此ところの人ありしはふへし秋ここし假名の碑とつくり洛の雙林ニ借養とうけて世の名をまんなれハ如何此のもあとをとかくし俳諧の名をもて人ニ對をしとそする今なる此人にけちをそあるハ風雅の園孫もあくさるるなれりむかし秋迦如来の最後の説法ニ須跋陀羅此をし入給ひしハ光の世ニ㢓兎のちをるあらとそあるハ禄のも此人ありて最後の門人ときとえつゝする三世のちからひるやし寰ニ兎のてまをうそ此名のめしとく

ふるまひたてゝ俗のまゝに通行して公ゝ完のまゝ辨
ずに付たのちまことにてくちうとのまゝ
ゝ体と風流の工達し智鈍の間と居ありてれたに
知るとたれけんいまを雲のうちもとく一すゝ也

仮名辨捷路ニシテ人ヲ誘ユルニ文アリト云ヘシ去ヒハ鹿兎角縁
ハ遺教経ノ趣向ニメ其人ヲ所人ニ前ヘタル最後ニ手ニハ好舞
ナラン況ヤ虎子ヲ辨明シテ彼ヵ上下ニ五ケ寄ヒタル例ニ作諧
業格ヨリ盗賊ハ一ツ二柄ノ短ニ息ナリ但シ天下村ハ福居ノ雪ニ

自得辨

北七室

ちくゝ世界のわ失とそうこは豚ヲ毒あれゝ咎ゝ
ゝ有おおくゝ所月ヲ胃ふあも買人ゝ也ゝ
河豚ヲ毒ふくゝ龍宮の制れるのゝれて汗男ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かふてよゝゝゝゝ抑ゝ天ゝの光加減ゝて得失當分
ゝゝゝん有ゝ也ゝゝゝて髮あれゝ牙ふく九紋ふれゝ
巽ひゝ月のあゝれ平ふく九紋ふれゝ
世ゝゝゝ所ヲあゝふゝとゝ那ヲのおゝゝ抑ゝゝ
本邦の布ヲもゝゝゝゝゝ義惡ヲふれて義惡ヲゝゝ
ゝれ世ヲ抜ゝゝ人ヲ求ゝ人ヲ求ゝ人ヲ求ゝ人ヲ求ゝ

ちりあくよりはれりといひむ隠逸の人の渡世のうて
世よあるいとなかりしかくて世をいとく畜類のごとく貪之
冨報の園とよりもて得るもあるひ失るもあるひ
飯汁と酒月とをなくみな乳の恵と酩酊をて一盃一醉
の服かゝと本性の美のたちまちうい月とはもちかの
くもと異もなりろくあるいかりろく者とみの美
もなりろくまものかりのもの秋の文それもえりかりろ
くあるとかりろくおもかりろく是もかりろく得も
自得のかりろくあるく失も自得のかりろくあるく
行云所辨ハ在ヨリ意地ナカラ全ク俳諧ノ筆法ナリ表ハ兩面ノ

喻ヨリ自得ノ趣意ヲ以成ル篇中二十二箇ノ面白ヲ用イテ
春秋ノ角三箇ノ面白ヲ畧ス又三互照ノ法アリトスハン然ルニ
四季ノ詞ノ重テ而ニハ四季ノ姿ヲ云イ後ニハ四季ノ情ヲ云ヘル
此等ハ文ノ体トスルヘシ猶シテ龍宮ノ制札俳諧ノ人ノ常話
ナカラ此篇ノ角ノ奇絶ト称スヘシ但シ作者ハ越ノ新保ニ任ス
北村氏ノ凡人ニシテ先師モ此師ヲ称名セリ

梅巨者辨

井章平

源卑之梅もちをとひてきて陳之梅と拾て梅と呼し
梅のひとなりて雨ものへよりきく梅の末

たゝなもの〳〵世にあるを人のこゝろにまかせて座よりおりの梅
を植てあるを世界の摸擬なれのまねをするとやらんやて
ぬるをしてかゝるものゝあるをりいまや梅を買て隠れと
あるんゝ但を梅と書てもたゝるんゝしらぬ梅の
咲はあるへ〳〵はて知ぬこゝの井をしありて其一を
ある人の井をうして其一を酒たくる車井あり今一を
掘ゝ行瓶とおろ〳〵のてゆてあるを井筒ゝ水桶
之月とをて〳〵宮之はつをのあらひも清〳〵ゝのあ
るゝ蓮とをんて諸之やをて〳〵よ池いのりて蓮のむ
ゝゝやをゝ梅をこなをゝをゝ根の畑之茎ゝ根よりはけ

ゝ加の有宗ゝ其只之をゝをゝたをこゝをゝをゝ和の家の中之
稲荷の社やゝをとあるゝを立て宮をもゝるゝ社のかゝゝき
ゝに廉もあゝ不発も所して稲荷の社見もみの宮之
かゝるゝ〳〵はをとて市中之間とををてゆくゝやをて人へ
のえゝををんとかゝくゝを以神のゝくゝをとをて隠ゝゝや
るんもゝるとやるゝ〳〵はゝをゝの梅の咲はるゝ一一
仮云ゝ辨ハ虛誕ナルニ似テ家居ヲ辨スルニ師ラサル所アリ
墻シテ荘年ノ分別ナラハ隠長ノ間ニ心ヲ留テ其家ノ
神慮ニ任セントハ誠ニ虛妄ノ自在ナルカ去ルハ和靖カ俤
ヨリ漢ニハ李叔カ愛蓮ヲ云イ倭ニハ有宗カ敏樹ヲ云ル

倘両ノ二字ハ首尾ノ文法ニシテ文章ヲ裁ツニ力ヲ用ユト
云ヘシ但作者ハ濃ノ岐阜ニ産ス姓ハ井上ニテ梅長者ハ僧号ナリ

巴丁ニ與一枝辨　　東華坊

竹枝は越ねの高田あるへし紀の本氏の人これにあそひて
紀よ高ねのちりくをたてつしよ紀やしけ枝と巴ぞうれ
あそて越の名残と宴にそむけるに山国にしけあつて
ありて風雅のんさし深うねハやはらも枝を花とさしれと
て北もも一万里の人よしもあひ月雪もの吟ひよも一日
も竹笑ふうんやあらりはよ竹杖ハ紀もてすしめといまそ

賓の福光川のなかれにそむかの南風のねなるハ龍
と作しきこゆるとなりて一しかして竹枝のもさしれくなり
女子殿の時に送しく女子殿の時に離ハそかうらへ
深寒への色とまし、へて竹枝をはよきてこやなりし沙ハ
きこ行しよ稲と飛ちうてかりうも傍に承るると
このまゝて継よく高ねと作とあひうて三千にこそしを
竹杖にみえうしりして悲しむもの府とやかへしるの一節
のあふよあそんといふに作る竹枝の作くいとを青の
名残とそしれしをきこ
杜云竹枝辨ハ比体ニシテ杜甫カ批杖ノ意ヲ含ムトモ文章ノ

實地ナリ然ハ林ノ一字ヨリ世君ハ王子敵カ愛情ヲ云イ
・化龍ハ費長房カ仙術ヲ云ヘル然寒ノ色トハ然系行
寒ヲ行ナリ去ハ巴分ハ先所ノ右内人ニシテ北越ニ風雅ノ
名ヲ知ラル今モ其林ヲ付長ニシテ其子孫ノ記録ニ殘セリ
トソ彼カ山雪集ニモ見ヘタリ

招魂辨　　推左角

人ヨ魂ニアリ其一ヲ昭々靈々トシテ鏡ノ新ヨ
ヒ〳〵ヒ〳〵ヒ〳〵

[illegible]

武陵の春よりとはあり園中の春の
世界あり[illegible]
[illegible]費長房の歳のあらしとも劉玄石の醉
の[illegible]風味[illegible]

仁云此辨八宋玉カ題ヲ借テ其詞ハ虛誕ナルニ似タレト儒仏ノ
言語文字ヨリ人界ノ分別理屈ヲ離レテ自己ヲ求ルニ實情

より誠ニ性ノ昭々名物ノ善惡ニヤメヨウヌ二臣ノナス所ニ隨フハ
盃ヲモ読殘セル所ニノ俳諧ノ家ノ筆力より殊ニ世屏ノ名臣
ハ五ヨカ齊物ノ詞ヨリ出テ而骸中ノ君臣ナラン去ハ類ハ晉陽
トハ起句ニ貫君ノ隱ル所ヲ云イ晉陽大君ハ結語ニ題ノ招
ノ子ヨヲ云ハル遠ク文章ノ互照ヲ知リテ情達自在ノ文法ト云ヘシ
但シ園中園ハ侘角ヤ別墅ナリト

読類

勢上人説

東山長味

勢の跡れるものあらもくくそむりあるし
ひつくしたかくてあれとも思ひきる下宮中ナてさん

とのれるかり紙と成りあるむしとをかるる心戒とつ
名をとけうりとめくるるかるのあるりよかるるる
世とる人の腰折と一てるひるる
夕乳とるるるられ上人を
御のをるわやくるるん を年
往古世篇六峯に集ニ在リテ今ニ之ヲ題ス加フ誡ニ世老人集
世ニ名アリテ大名ノ隠有ノ先賢ト仰ケリ世モ詩ヲ達人
ニシテ世業ノ盧實ニモ遊ヘリトフ

名小路主説　應浪化

汗を満足ら汗ら牧のかるふるる餡と砌てかり
乳の皮とむくくくくにたるあるるるあるあるき
和とむらん自然とおむきるるるるあんら世ゆへ海と
たるふるすく狙公ら猿と養ふるるるるる家と仮られ
ふるるのるとは仮あるる帯とられるものるを掃くくる
るるる竹田ら人殺るるんるる土計のかるるるあるるるを
たるるる海ら乳の漫とるて陽るる粥るるるるれられ
世の鈍るるると躰とるるるるるるるるるるるるるるる
るる養ふのるるるるるるるるるるるるるるるるるる
る譬るるれて自慢の慢の鼻やるるる饅頭の

饅の丈やくふて〻但を満足の二字をとて汝ら乳の
一方福と称とゝ汝らんをそもと満足なり〻〻
但云此説八備足ノ二字ヲ以テ小姑主ノ名トナセル去ハ満足ナト
呼カケテ二蘇先カ説ノ汝ヲヨリ一篇ニ二字ノ汝ヲ用ルニ
文章ノ意地八各別ニ此等ヲ換骨ノ法トスベシ誠ニ飴瓜ノ喻ヨリ
但云方猿八朝暮ヲ云〻君氏ト硯ハ利鈍ヲ云ハ竹田ハ体諧ノ
筆格ヤリ但シ此云越ノ瑞泉ニ住シテ樵山人ハ号ナリトフ

櫻商人説

禾宇中

弁をえ禄の幸こふん東西お話の選場〻所郷の名此

もわらと悔こてはとそ此弁こ此お話はくこ汝此
此幸坊の名とかりて安宅(アタカ)の関と越人とをこ汝こ
勧進帳の詞とはこ〻共に詞〻
此宇中こ〻ものこを富国山杉の風雅人こ〻て
蕉門の忘こ〻あこ〻こ〻こ〻こ〻こ〻西お話の郭
こ〻こ〻れこ〻こ〻の弁こ〻会こ〻おこ〻坊こ〻こ〻けくに
掘山坊の笑こ〻かこ〻て掘商人の足跡をこ〻こ〻
こ〻む弁こ〻こ〻れ宇中こ〻ひこ〻こ〻こ〻れい
おこ坊こ〻こ〻こ〻こ〻こ〻の幸のこ〻おこ〻もへ後(エン)の行者
の高本殿こ〻こ〻こ〻て国の人こ〻こ〻ゆこ〻し

又題中さゝかけの俳句に付て　雜料〳〵

そ付て固さを俳諧ゝ世ゝ子梅山伏
いさ根の五克井ゝ海鹿ふあり梅の手作ゝ公の
旅を「ちなの名と人も峰作ゝ云ゝ今此梅高人
ゝ高ゝ寿ゝる梅人ふゝや梅とあゝふふ高人ふゝや
俳句の餅ゝとかゝゝ梅ゝ作ゝ
縁あれゝたゝの山伏ゝ此高人も作のゝ
ゝ一ゝ紙俳の謝とかゝゝれて関のゝ
犯云此説ハ説ノ的面ニシテ虚誑ニ人ヲ論被ストニハシレ云ハ
五克井ノ縉餞別トハ先師北国ノ肩逢ニ許ニ亭ノ稜稜

野宿山橋ノ旅姿ヲ綴ヤキ一軸ノ巻物トナセル撰ニ伏トハ
其ヒヲ題字ナリ然ルヲ此題ノ名ニ寄セテ行者手賀
ニハ俳格ヲ顕ハシ作ノ一子ニハ詠体ヲ尽セル誠ニ文章ノ
桟鋒ヲ得テ北陸ニ此作有リト称スヘシ但シ其姓氏ヲ
ニシテ北苑坊ハ其號ノ假名トノ

名説

渡部犯

青々ちる武士ゝ九ゝふあり今ゝある居名ゝ十ふあり
下ゝあゝふふ東華坊とつい西ゝあゝふ時ハ西華坊と
ゝ華ゝゝゝ光や華やと俳諧のゝ訓とふ

たくさんの花をあつめ時々の香をとり奇くのひろ
あつまりを求めを一方さとも饅丁とも羅漢ら花の
跡とかくさりつたあつ書とてんれい華表(トリヰ)くとと
あるまことけい是仰斎あとひとてつれ月と
くたくあつて野と蕉の時い野盤のいいあとの
時い仰ま庵とてよ字をとをとをとの一支たちとて
ちを集の行名とあとちとさるもたのたの時の用
ありてこんと寶地ようちるあんたもく
然名の共物ちとちこれよりこい面もと釈迦と
きけくれるのとまるのとまるあたたくつるよて

遍照傍正ちの極あんにたれとをあよ疫あて雲宮
おをもとまれいけのひも雲のひも物に概ちも
ひかくちるに紙帋のナくとナをの乳
るんとナ九應分いとちて化地のおたるに
行云此説ハ頗挫ニシテ彼ニ泥蟲ハ名ヨリ此ニ十名トハ
云イヤチナラン然ルニ仰諧ノ字訓トハ指シテ華ト花トノ
字論ニモアラテ和音ト仰諧トノ別ハ茅ヲ云ル賞ノ心ニ
時鳥ノ雲モ共ニ音ノ永ノ花ニ寄セテ例ニ我家ノ文
法まう例ニ我家ノ意地ナランなモ此名ノ数多ナル中ニモ
華表人ハ丁今ヤ再生ヲ合ニ羅ヒハ彼ヤ跡ヲ隠セルヒトハ

岩ニ掛ケテ霜心其角ノ形容ヨリ其余ノ故アルモ故ナキモ總テ
い其時ノ應用ナラン志ハ儒仏ノ二老ヨリ和漢ニ詩ニヨリ人ヲ
ニノテ万物万係ラ此間ニ置ケ文ノ間約ヲ称スベシ但シ定家
ハ色黒ク顔ニ恒ノ跡アリトハ云人ニ續ケタル一説ニメ雪ヲ
能登ノ産物ヨリ然ハ一ツ扁ノ結語トメ化物ノ仲ニ近シトハ
此等ノ説ノ文鑑ト見テ霊貴ハ這裡ニ會取スベシ

名ニヨル説

木鷺助

むく毛蘇老泉ゆゑ人のよと軾といひ轍といふ此の
一ことをとまれるもの竟ニ重もをうこる理とすれ

ものゆゑ人のよに人を化けて病床の人となりたむ人とな
ものの見と爲虎と爲ふ人ひとりの猛氣をなるいて
百歳のおそれとなるあるて仲の物のあるいて
世のすべてもんよりは生れ竜と虎の威とかてとつる
世俗の説ふるたるみるふんまるに虎の石の祈るあるを
祈るの虎にして用ゆる時に虎となる用ひる時い
竜ゝふんて新ゝてけのよう威者とおさんやそて
富きともちると貧賤ともなると思ふ
みる新のようとしてみる遺金ふれんもけてその身と士私
てあ世ていきと入ってあて敵ものれ弟敵とれ

〻そ〻よ歳のこゝろあるとわのこゝろ
のこゝろ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

して師の学より伝へる一脈やうやく韓愈の所説に
通じ先進の論あれど師説を学ぶ人なほ〳〵
その人とあと〳〵ありしかども今の俗諺師の説
ならずかつ〳〵ここそこちひろめ学ぶそこの説
つゝ〳〵師をおろかなんとなげかんとこ
かんとするにせよ著書有の学よりも針灸と
あゝ人免元と賞して此をもて学問と尺る今
の俗諺の眼うゝ者世を偏蔽する所のものとんでは
只宜しくこの大根の説の如きものにうらてこの
物の学似ち学よの移りうるべきなの弊有

そ世学を虚弱に陥し疾気ども生ずるは法
況や大工木挽の学ものは学ぶ人をとやむはの
むゝ韓愈の恥の一なも今論出れい別るの二なせ
かるゝ世俗のりちふと生ずるを師説いきかくの
ことよりしるい野田氏のよう相臣とする者ほう
世説のんと伝へて俗説の師を求むゝ求むゝを
のるをとゝむ

往云世篇八退之方師説ヲ論スルニ全篇ニ彼カ通貫ラ
以テ用ル所ノ各別ナル彼ハ巫醫ヲ引テ儒法ヨリ鄙シメ
世ハ巫醫ニ喻ヘテ船諺ヨリ尊トム全篇ニ條文ノ一体アリテ宜ニ

論語ノ題意ヲ尽セリ誠ニ世界ノ理屈ヲ離レテ能諧通理
ニ達フトハ蕉門ノ以心傳心ニシテ史記ノ滑稽毛伝語ニ看破
スレ然ラハ此説ニ屎腸ヲ洗テ理屈ハ如何ン通理ハ如何ン
物ニ通理ノ無ランヤト讀者ハ爰ニ往返スヘシ全ク能諧ノ関
鍵ナリ但シ拙邑ハ備ノ倉敷ニ産シテ露堂ナカ嫡男ナリ

曾呂利

夜話説

左国秀吉公ある相の仁和語ゝ天下ゝおさまりき
りめを作らあるやとおもひ作をれゝとおもひ侯
きわたりとおのゝ作をふりとあるゝ知ふりとゝ

よわりとおのやをさをわいあゝ作おなをれゝとおもひ侯
ちりいりとあれゝ上わい三を三路ゝ作ゝ
仕られを作ゝとあるゝ
ふゝれゝかも氣をゝ作をふゝ人ゝとゝものをわの
ゝをけもふゝ用をもゝ知ゝとけゝをわ
をゝをゝを人ゝをゝ知ゝ氣ゝあゝいゝ知のゝと
ゝゝ作ゝゝ三ゝをゝ笑弟ゝもあひ男ゝとゝゝ
おゝもゝをひゝまゝとゝゝを国ゝ笑ゝを行ひをゝ
も感をゝれゝ

和云此夜話ハ咸(ヨハナシ)人ノ居傳ヘシヲ笑ニ読ノ一ヲ加フ去レハ

大周ノ一向ハ天下ニ我一人ナラテハ人ノ恐ルヘキ有ナシト諸人
ニ云ハスキ鈞語ナルヲ輕薄ノ佞臣トモノ案ニ落タルハ
口惜シ去ト富呂利カ答語ニテ一座心ヲ轉換セル禪家
ニ向若ノ活法ト云ヘシ誠ニ史記ノ滑稽傳ニ東方朔牧皐
ナト武帝ニ答ヘタル夜話ニシテ全ク佛諾ノ道ヲ論ハ国君
ヲ恐ルヽハ世界ノ理屈ニシテ国君ヲ心安シトハ佛諾ノ道理
總テハ佛諾ノミナラス文鑑一部ノ道理トテモ此等ノ風雅ヲ
ヲ

辻談義説

露五郎兵衛

けらく河滿陀師と老ひらく如来ハ五却の間思惟
ふされ上ニ人ならひ下の法ハ師と仕て法ヲすくふ
ちんとの誓願ハ師ヲ仕てあんだらを
ちさてするもとや故ハ沙陀如来ハ森羅万象の
けらとなて法くよ法のふすもふく十万里あるとの
西方ちとなとの方ハ伸ありて諸人の地獄とけらくと
ハ云ハをあくとうろうなれとも持国多門
ハ云ハ一騎當千の四天王ハ作れ地獄とけらを
ふなをふいと高座とをいてトもれハ主座一ハよ
ハ三部一ハ蔵をねりのらをふりまり
犯云ハ者ハ夷洛ニ名ヲ知テ洛陽ノ仏支条礼ニ彼ヲ之居

ヲ張サル度ナシ世ニ云フ辻噺ノ元祖ナリト言シ祖翁ハ世有ノ名ヲ
秘シテ露ノ子ニハ新古ノ掬アラント可笑シ　ハリトヤ然レハ
曾呂利カ夜話ノ説ハ俳諧ノ家風ヲ窺ハシ侍臣ノ数言茶ナラン
ニ世ニ公命ハ亟ニ金ニ似タレト祖翁ノ一語ニ縁テ結ハルハ杜五郎
カ名ノ外ニ俵ヲ古今ノ文者ノ列ニ入リタル誠ニ任言
綺語ニカラ一花ニ　ニ花ニ徳ナル一ニ

蕎麦切頌　二升堂

むしろ蕎麦のむの解にくらて文をのこれひき
ちり花ちくさ　ちひ葉のむもはらふ色をさらしアラハ

ヨリ　あくあろ言ふのを色ふてしいかいさのむ
寿とかたてはとふまとたくんふあけそれ武士
の喰ねうしてあと系の男にかくるもわさんたを
と祖ちとはの義も称ふれの俳諸の新ふうてわら
たちとはの汁のあやまさ　山堂（ワサビ）のかうえ
魚ふてるふ義ふ俳諸のしもはうたを蕎麦切のも
あるて儒仏一貫の風味とうふんちもふをの頌を
以ハ宗ふ文集ふ　ふのむと称　本ふうは仏ふ
ふの言と称ふたれと称ふあの言人ふ　ふ大ふ
たちふれと蕎麦切の言ふるふ　やんさると西川

のみならず秀衡が沈香の柱とこれ世の樵夫に伝へられ
ぬしてうみてみてもうゆれ〳〵ゆれ〳〵ゆるがし
の富貴に似たれと今は昔の夢つゝ人とつゝたもく
富貴却の諸下るに一時とかて市中の富ありしや
鐘の神もはく〳〵はく〳〵と鳴とて陸奥の三郡
も雷音の入るも栗毛と二ようとけおもう大根
の下知とまりしまるを西の類とたくさんも
くもしく伊吹山あるの麓とあくまで対面
ちりとあり苦とつあの能登の国きつのりといひ
伊勢の国きのりとひきの国くのあ苦あれし

ちとつあはのうしあるねいあるかさはもの三
宝と軍とつあは源氏のうしあるゝ梵網の戒経
きゝきゝれてあれのそのてゝうしまゝ苦いあさつ
ゝもかつきゝもみを祈きし祈ゝもゝ手まわくの
えをかつれも表むをゝえとゝきゝえをかのねを
ひあつれと久末の四ひつ一体とかくて祈ゝもめくゝ
ゝめを苦とゝ苦ゝいてゝれゆゝうよ屋のえとかくゝてたの
ゝよも叶冠ゝ軍ゝかゝかをゝ体ゝはゝくゝめ舞ゝとゝ
で渡の高祖の文郎ゝもあゝねゝ祈も陸機ゝ頃
あゝひて今ゝを苦ゝ苦ゝゆの住とちゝゝも

任云世頃八此体ヲ去ル八文武ノ両道ヲ云イテ風雅ノ剛柔ニ
比セルナラン然ルニ此作者八花鳥ニ篇ト云ル集ニ蕉堂ノ
花ノ解ヲ作リ今ノ会ニ世頃アリテ坊ノ一子ヲ康ルト云フヨリ
両ツニ文道ノ趣ヲ尽サヒリ或八西行ノ蕉堂ノ名ト八世俗
ノ和ヲ ノ詠八サルヲ云クテ鳴立ル ノ撰ヒサル体ヲ或章ノ
ヲ八立ル幸ノ物名ヲ詠ノ名言ニメ源氏ニ
禁綱八和漢ノ奇対ナラン或八陸奥ノ功臣頃ニモ文武ノ二
ヲヲ云ルヨリ会ニモ蕉堂ノ花鳥ヲ称ス世等ヲ托物
比興ト云イテ盛宴ノ文鑑ニ看ルヘキヲ但ニ作者八
武門ノ名ヲ隠ノ濃ヲ山陰ニ嘉道ス工作八世俗ノ蕉堂
ト

コリスニノ
不懲亦頃　　木林百九

遥々ケ〻ケ〻唐土の鸚鵡鷺杓鷸孟ケの鯨とゝり
ケの地ケ対ケケのケのケのケのケのケのケのケのケのケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ

[illegible]調[illegible]はれとその原に臙脂坡
ときてあきれ〳〵世[illegible]ふれうふるうとやとれたり法と
はんて和漢に所[illegible]る人と設のごとく鈍のごとくひたし
能遠鏡屑の性と体[illegible]等[illegible]うとうれ[illegible]とれ
とあ〳〵人と[illegible]して或[illegible]ることなりわるの[illegible]ひて
[illegible]ふ人あ[illegible]人[illegible]とこれあとまつかさくしあり
[illegible]こ罪[illegible]こ[illegible]こ[illegible]て行と[illegible]の種
やくあん舞[illegible]ためにたれ[illegible]りとも[illegible]人の
[illegible]ふ[illegible]て[illegible]むることのれてあ[illegible]人[illegible]あ[illegible]と
[illegible]とやふひ[illegible]とやとも[illegible]てむの花とかく[illegible]て

[illegible]とあ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]
けの人と[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]
つ[illegible]れ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
と[illegible]
[illegible]

いまゝら跡のくしけかゝ[illegible]
の花しゐ〳〵と全谷園の例も高ぶりかゝ[illegible]
却とつひその活とゝもめ[illegible]
うて高くのちうてら紅梅の[illegible]
屋くつりてを新官城のうちいとめつうと宝工
以盃のこうを活ふんこ園雅の間又宴をとちうて
ちのんの活よさうち故ちゝ

仮名無賀八不根ノ持論ニ依テ全篇ニ頂色ノ中庸ヲ説クル
誠ニ潤飾ニ訓解ナラン但シ此名ハ和名ヨリ出テ物ニ徴ヲ
トラフ故ニ先ヒハ此詞ノ艶美ニ流レテ能説ノ家ニハ好ム

ニシキ子ノ山ノ名ニ附タル歌ニ屈龍ニ水ヲ入ケルヤ如ク歌ニ其ノ影ヲ
移シテ文章ノ死活モ物名ノ好悪モ此等ヲ文鑑ニ入キ
ヨリ絶テ一篇ノ故事古語ハ之ヲ面ニ衛ウ之ヲ入レシ和歌曲ニ
解スルニ至ラ人々サス

醋徳頌

高九朝

醋とむらし誰うたうたちうむ酒と味とうゝ
てそれと拍ゝ人もあんゝ酸てゝ性の長ハ日ふ
しかもてや長のゝ伝朝ゝたゝやからゝ醋
の同とたゝし冬のゝ活義のちてかゝゝ酒の糟口

[illegible]

[illegible]

[illegible]

短句モ慮外ノ奇ト八隠見ノ法ニシテ絶テ似給ノ筆格ナルヤ
去ル夕女トモ見ツ田カトハ斉書ノ詞ヲ借ナカラ鶏鳥之助ヲ女ト
見損シタルカモ一篇ノ肯尾シテ如モ一篇ノ名言ト云ヘシ
但シ作者ハ越ノ系図ニ住ス高野氏ノ俳士ナリ

松音頃

川宣嘉

世ニ安寧ノ御ハ有テ麦米ニ其ノ実ヲ稔
樹樹ニ其ノ枝ヲ茂ラシ実ヲ結ブモ
い和漢ニ渡ル其ノ御ハ有レ神と人と雅
ふんと人のたうえねもむへ有ニ言ニ行音ニ

地ニ其ノ実ヲ稔ラシ樹樹ニ其ノ枝ヲ茂ラシ実ヲ結ブモ
ニ和漢ニ渡ル其ノ御ハ有レ神と人と雅
百ニ言ニ行音ニ有レ山ノ其ノ実ヲ稔ラシ樹樹ニ其ノ枝ヲ茂ラシ実ヲ結ブモ
のうふ様ニ有レ中宮のおほ御ハ有レ和漢
いうふる様ニ有レ中宮のおほ御ハ有レ和漢
ふ様ニ有レ中宮のおほ御ハ有レ和漢
ふ様ニ有レ中宮のおほ御ハ有レ和漢
ふ

のてとかふりてもちゆ世とゆてこれとけの
おこれる世とこれとては日のもとかとも慈(ムシ)杜菖と
とてふりて夏の哀云の鬱(ウツ)ニ應もちゆきの飯よ
酔もありともいそとれをもてとつもるつゝあるは
風閑のよ夏ゆとかこまりあるなゝ魚町の八百屋と
乗これゝ今を西鳴の遊ゆとも東園の改童
もまりりて吸ものゆ柚と色もまりゝて
ゆもありてもりもゆ風雅のもりゆあるゝ
和云所頌八鼎体ナヲ始ハ義人會屋ニ寄セテ清潤
ノニヲニ轉換セシヨリ終ハ聖人ノ行藏ニ喻フ況ヤ

草木ノ花實ヨリ花實ニ風雅ノ一様ヲ起シテ一様ノ花
實ニ姿情ヲ結シタル所等ヲ首尾ノ文法ニシテ常ニ
ノ蛇ノ働アリトヽヘシ去ハ和漢ノ草紙ト漢三本竹角
譜ヲ云イ侍ニ徒(ツレ)然ノ鯉ノ段ヲ云ヘル小之秋カ露モ秋風
モ柳櫻ノ之詞トモニ總テハ古今ノ伊ナラン或ハ其香ニ甚
ハ句對ノ中ノ絶妙ニシテ論語ノ蕾(ハナカニ)ハ好鮮ト云ヘレ尤モ文章
ハ置合ナリト見テ清潤ノ詞ノ續キヲ称スヘレ謝所名ノ風雅
ナル岩窓針菖ノカタミモナク紅菖(ニ)ト治(チ)ノヌメリモナキヲ最
松菖ノ名ヲ頌シテ花實ノ當用ヲ知レトナリ但シ作者ハ
越ノ新深ニ住ス吉川氏ノ文士ナリ